

## ローマ人への手紙8章31-39節 「神の愛にある勝利」

### 1A 敵対できない勢力 31-34

1B 味方になる神 31

2B 御子にある施し 32

3B 義認 33

4B キリストの執り成し 34

### 2A 引き離さない愛 35-39

1B 苦しみの中にある勝利者 35-37

2B あらゆる被造物 38-39

## 本文

ローマ人への手紙 8 章を開いてください。私たちの聖書通読の旅は、ローマ 8 章 30 節まで来ました。今朝は、31 節から 39 節までを一節ずつ学びますが、一度、全部を読んでみます。「<sup>31</sup>では、これらのことについて、どのように言えるでしょうか。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。<sup>32</sup> 私たちすべてのために、ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された神が、どうして、御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるでしょうか。<sup>33</sup> だれが、神に選ばれた者たちを訴えるのですか。神が義と認めてくださるのです。<sup>34</sup> だれが、私たちを罪ありとするのですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、しかも私たちのために、とりなしていてくださるのです。

<sup>35</sup> だれが、私たちがキリストの愛から引き離すのですか。苦難ですか、苦悩ですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。<sup>36</sup> こう書かれています。「あなたのために、私たちは休みなく殺され、屠られる羊と見なされています。」<sup>37</sup> しかし、これらすべてにおいても、私たちが愛してくださった方によって、私たちは圧倒的な勝利者です。<sup>38</sup> 私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いたちも、支配者たちも、今あるものも、後に来るものも、力あるものも、<sup>39</sup> 高いところにあるものも、深いところにあるものも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」

圧倒的な勝利者であると宣言していますね。パウロが、これまで語ってきた福音の勝利です。それは、私たちがキリストのお姿にあずかる栄光の日が来るまで、苦しみとうめきの中に生きるけれども、神はその中にあっても、キリストにある愛をもって私たちを守ってくださるということです。

私たちは前回、キリストが苦しまれて、それから栄光に入られたけれども、御霊によって神の子どもになった私たちも同じように、今の時代に苦しみがあるけれども、また、この贖われていない

からだがあつて、うめいているけれども、いつか解放されるという望みがあることを学びました。それまでの間、私たちの心のうめきになっているものを、御霊がみこころにしたがって執り成して下さっていることを、教えられました。御霊が助けてくださるだけでなく、父なる神がご計画を持っておられて、すべてのことを相働かせて、良きに働かせてくださることを見ました。私たちは予め知られていて、それで、御子の姿に変わることを予め定められていることも知りました。召され、義と認められ、そして栄光の姿に変えられるところまで、神はすべてを予め定めておられたことを見ました。

そういうことであれば、どういうことになりますか？ということパウロは述べているのです。結論を語っているのです。私たちに敵対するものがあります。それが霊的な敵、サタンや悪霊どもにいますし、物理的な苦しみも自分の心に疑いをもたらします。なぜ、神がこんな苦しみをもたらすのか？もしかしたら、神は私を見捨てられたのか？…そういった疑いが、苦しみやうめきの中で浮かびやすいです。それで、パウロが、これだけの神のご計画があるのだから、断じてそんなことはないと論じているのです。

#### **1A 敵対できない勢力 31-34**

##### **1B 味方になる神 31**

<sup>31</sup> では、これらのことについて、どのように言えるでしょうか。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。

これまで見て来れば、神は私たちの味方であることが分かりました。「8:28 神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています。」すべてのことを相働かせて、益となるようにして下さるということですから、神は私たちの味方をしています。パウロはすでに、5章1節で「私たちは信仰によって義と認められたので、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。」と書いていましたね。神との平和というのは、神がもはや、敵対していないということです。私たちが罪を犯すことによって、神に敵対していたのを、その敵意をキリストが十字架の上で受けてくださったので、私たちの罪を身代わりに負ってくださったので、今は神と平和を持っているということです。

しかし、私たちに苦しいことが起こると、どうしても、神は自分に敵対しているのではないかと思ってしまう。自分に欠けがないということはないですから、もしかしたら神は、その自分にある隠れた罪をあげつらって、自分に対して苦しみを送っているのではないかと思ってしまうのです。ヤコブが、息子ヨセフを失ったことを思い出してください。ヨセフがいなくなった後で、飢饉が起きました。食糧を買いにエジプトに行って、帰ってきた兄息子たちには、シメオンがいませんでした。さらに、「次の旅にはベニヤミンを連れて行かないといけな。」というのです！それで、ヤコブは嘆きます。「創42:36 おまえたちは、すでに私に子を失わせた。ヨセフはいなくなり、シメオンもいなくなった。そして今、ベニヤミンまで取ろうとしている。こんなことがみな、私に降りかかってきたのだ。」ここで英語は、「こんなことがみな、私に敵対しているのだ」というように訳されています。

「こういう悪いことも起こった。あの悪いことも起こった。これは自分にすべて齒向かっているのだ。」と受け止めたのです。

しかし、どうですか？実は、これらの出来事は、すべてが、エジプトにいる、生きているヨセフに近づけるための出来事だったのです。自分に敵対していると思っていた事柄が、実は相働かせて、益になっているということだったのです。神は主権者です。予めすべてのことを計画しておられる方です。この方が味方なので、どんなことも敵対できないのです。

## 2B 御子にある施し 32

<sup>32</sup> 私たちすべてのために、ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された神が、どうして、御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるのでしょうか。

ここでパウロが言っていることの背景には、35 節に出て来る「飢え」があると思います。貧しさ、事足りるようなことです。キリスト者は、貧しさから必ず免れるわけではありません。いや、信仰のゆえに迫害され、職を失う人たちもいました。そして迫害でなくとも、私たちが主に献げたいと願う時に、生活の糧がどうなるかもわからない時に信仰によって前に踏みでるということが必要になることも、多々あります。イエス様は、このことについて、「マタ 6:33 まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。」と約束してくださいました。パウロは、「ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された神が、どうして、御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるのでしょうか」と言っています。神が、私たちに恵みを与えないというけちなことをすることは、到底考えられません。すでに神は、どんなものよりも大切な、ご自分の御子のいのちを、私たちを愛するがゆえに、惜しみなくくださったのです。ならば、その他のことについて、御子とともにすべてをくださるのです。

ヘブル人への手紙で、神は決して見捨てないことを約束している箇所があります。「13:5-6 金銭を愛する生活をせず、今持っているもので満足しなさい。主ご自身が「わたしは決してあなたを見放さず、あなたを見捨てない」と言われたからです。6 ですから、私たちは確信をもって言います。「主は私の助け手。私は恐れない。人が私に何ができるだろうか。」たとえ経済的に多くを持っていなくとも、私たちは金銭を愛する生活をしていることがあります。それは、今持っているものでは足りない不安になり、それでしゃかりきになってお金を儲けようとしていることです。けれども、神は決して見捨てないから、今持っているもので満足しなさいと教えています。

大事なものは、私たちは貧しくならないということではありません。神の恵みがあり、貧しさの中でも必要は必ず満たされることを約束しています。覚えていますか、イエス様と弟子たちは貧しかったです。ペテロの家に、神殿の納入金を徴収しに来た人がいましたね。それを支払うお金さえなかったのです。ここでイエス様の言葉が大事です、「シモン、あなたはどう思いますか。地上の王たちはだれから税や貢ぎ物を取りますか。自分の子たちからですか、それとも、ほかの人たちからです

か。」ペテロが、「ほかの人たちからです。」と答えると、「ですから、子たちにはその義務がないのです。」と言われるのです(マタイ 17:24-27)。つまり、神の国を相続する者たちであり、神の子どもであり、キリストと共に王として治めるのだから、納税の義務は本来ないのだ、と言われているのです！この心の余裕が欲しいですね。神の子どもは、神の国を受け継ぐのですから。そして、イエス様は、ペテロの得意な漁によって、銀貨をくわえた魚を取らせ、それで納めさせたのです。

パウロは言いました。「ピリ 4:12-13 私は、貧しくあることも知っており、富むことも知っています。満ち足りることにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、ありとあらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。13 私を強くしてくださる方によって、私はどんなことでもできるのです。」そして、19 節にこうあります。「また、私の神は、キリスト・イエスの栄光のうちにあるご自分の豊かさにしたがって、あなたがたの必要をすべて満たしてください。」

### 3B 義認 33

<sup>33</sup> だれが、神に選ばれた者たちを訴えるのですか。神が義と認めてくださるのです。

キリスト者が受ける大きな試練は、「訴え」また「告発」です。迫害の中で訴えられるということは、多々あります。私たちの主ご自身がそうでした。パウロがそれで、ピリピでは、裁判を受けずにむち打たれました。このような物理的な訴えもありますし、いろいろな形での、訴えがあります。信仰を持つことに対して、それがいかに悪いことであるかのような圧迫を、私たちはしばしば受けます。そして、その訴えは巧妙になり、私たちが見た限り、欠けがあるようなところを、実際よりも大きく拡大して、訴えるのです。

そのようなことをする人々の背後に、だれがいるか知っていますか？悪魔です。黙示録 12 章で、竜が出てきます。悪魔とも古い蛇とも呼ばれています。「12:10…今や、私たちの神の救いと力と王国と、神のキリストの権威が現れた。私たちの兄弟たちの告発者、昼も夜も私たちの神の御前で訴える者が、投げ落とされたからである。」

サタンは告発者、中傷を行う者です。ヨブに対して、彼が神の前に正しく生きているのに、何と聞いたか覚えていますか？「1:9-11 サタンは【主】に答えた。「ヨブは理由もなく神を恐れているのでしょうか。10 あなたが、彼の周り、彼の家の周り、そしてすべての財産の周りに、垣を巡らされたのではありませんか。あなたが彼の手のわざを祝福されたので、彼の家畜は地に増え広がっているのです。11 しかし、手を伸ばして、彼のすべての財産を打ってみてください。彼はきつと、面と向かってあなたを呪うに違いありません。」」ヨブが神を恐れている動機を疑わせ、彼に富があることを理由に、それがあから神を愛しているのだとそそのかしたのです。そして悲しいことは、彼の友人も、そのサタンの中傷に加担してしまったことです。ヨブがこれほどの災いを受けたのは、彼によほどの罪が隠されているからだとして、彼を責めました。ゆえに、私たちも気をつけなければいけません。

しかし、神は、ご自分で選ばれた者たちを「義と認めてくださる」と言っていますね。そうです、悪魔がどんなに、神に選ばれた者の欠点をあげつらおうと、神がその恵みによって義と認められているのであれば、もうそれで決着が付いています。悪魔は、義と認められた者に手を出すことはできません。パウロがここでこの言葉を書いている背景は、おそらくは、ゼカリヤ書 3 章だと思います。バビロン捕囚から帰還した者たちが、神殿を建てている中で、サタンが、大祭司ヨシュアのことを訴えました。「3:1-4 主は、【主】の使いの前に立っている大祭司ヨシュアを私にお見せになった。サタンが彼を訴えようとしてその右手に立っていた。2 【主】はサタンに言われた。「サタンよ、【主】がおまえをとがめる。エルサレムを選んだ【主】が、おまえをとがめる。この者は、火から取り出した燃えさしではないか。」3 ヨシュアは汚れた服を着て、主の使いの前に立っていた。4 御使いは、自分の前に立っている者たちにこう答えた。「彼の汚れた服を脱がせよ。」そしてヨシュアに言った。「見よ、わたしはあなたの咎を除いた。あなたに礼服を着せよう。」サタンが、汚れた服を着ているヨシュアを訴えています、それでも主は、エルサレムを選ばれています。主が、ヨシュアを燃えさしから取り出した、つまり裁きから救ってくださっているのです。そして、訴えているサタンをかえって咎められ、ヨシュアには、主に仕えるためのきよい礼服を着せています。これが、私たちが義と認められていることの姿です！古い自分は脱ぎ捨て、キリストの義を身に着けたのです！

#### 4B キリストの執り成し 34

<sup>34</sup> だれが、私たちが罪ありとするのですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、しかも私たちのために、とりなしていかくださるのです。

33 節は「訴える」ということでありましたが、こちらは「罪ありとする」、つまり有罪です。告発し、それから有罪にされます。私たちの主ご自身が、罪のない方なのに、訴えられ、罪ありとされました。使徒たちもその証しのゆえに、訴えられ、罪に定められました。

けれども、ローマ人への手紙でパウロがこれまで論じてきたのは、私たちが、キリスト・イエスにあつて決して罪ありとされないのだということです。「ロマ 8:1 こういうわけで、今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」主ご自身が、「ヨハ 3:17 神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。」と言われたのです。ここは、「世を罪に定める」とも訳せますが、主が来られたのは私たちが罪定めするためではなく、すでに神の前で罪ありとされているところから救われるためだったのです。未だに、主が自分の過ちを見つけるために共にいるのだ。警察や監督官のように、自分が過ちを犯したらそれを見つけ、罰するためにおられるのだと感じていたら、この言葉を思い出してください。主は、世を裁くためではなく、救うために来られたのです。

主は、私たちが救うために死なれました。そのことで、私たちがこの方の義をいただき、主ご自身が罪ある者とされました。しかしそれだけではありません。よみがえられ、天に昇られて、「神の右の座に着」かれたのです。神の右の座に着かれるというのは、ご自身が私たちの罪のすべてを



清め、清めを成し遂げたことをはっきりと示しているのです。「ヘブル 1:3b 御子は罪のきよめを成し遂げ、いと高き所で、大いなる方の右の座に着かれました。」動いておらず、座っておられるのは、もうやるべきことを成し遂げられたからです。

そしてそれだけではありません、「とりなしていただきますのです」とあります。「ヘブル 7:25 したがってイエスは、いつも生きていて、彼らのためにとりなしをしておられるので、ご自分によって神に近づく人々を完全に救うことができになります。」私たちはこの地上において、最後まで信仰を保っていなければいけません。その道中は険しい道かもしれません。信仰から離れる誘惑もあるでしょう。つまりくかもしれません。けれども、主はそうならないように、前もって祈ってくださっているのです。

イエスは、ペテロに対して執り成しをすることによって、サタンの試みから彼を守ってくださいました。「ルカ 22:31-32 シモン、シモン。見なさい。サタンがあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って、聞き届けられました。32 しかし、わたしはあなたのために、あなたの信仰がなくならないように祈りました。ですから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」このようなイエス様の執り成しがあつて、ペテロはイエス様を三度否むことによってつまずいたのに彼は信仰を失うことなく、イエス様に立ち直ることができたのです。このような執り成しの働きを、天においてイエス様は私たちのためにしてくださっているのです！

## **2A 引き離さない愛 35-39**

### **1B 苦しみの中にある勝利者 35-37**

<sup>35</sup> だれが、私たちをキリストの愛から引き離すのですか。苦難ですか、苦悩ですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。

これまでパウロが、問いかけるかたちで、私たちの魂に挑んでくるものを取り上げました。敵対していること。事欠くこと。訴えられること。罪ありとされること。これら一つ一つに断じてないことを話しましたが、最後に、「キリストの愛から引き離す」ことを取り上げています。苦難、苦悩、迫害、飢え、裸、危険、剣ですが、これらの中にいたら、「キリストは私をはたして愛しておられるのか？愛していないのではないか？見放しておられるのではないか？」と心に疑問が浮かぶわけです。

ここでパウロが列挙していることは、まさにパウロ自身が通ってきたところです。コリント第二 11章 23-28 節に書いてありますが、以前も読んだので省きます。後で読んでみてください。恐ろしい苦しみを彼は経ています。

初めに「苦難」とあります。イエス様が、苦難の中にあつてもそれでも勇敢でありなさいと言われました。「ヨハ 16:33 これらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあつて平安を得るためです。世にあつては苦難があります。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝ち

ました。」そして、「苦悩」は、内側にも圧迫が来ている状況を言っています。私たちが苦しみの中にあっても、心への圧迫があるかないかで大きく違いますね。そして、「迫害」はキリストの名のゆえに危害を受けることです。「裸ですか、危険ですか、剣ですか」とありますが、これはパウロの時代においては、現実的な危険でした。着物をはぎ取られたり、剣で殺されることも度々あります。

<sup>36</sup> こう書かれています。「あなたのために、私たちは休みなく殺され、屠られる羊と見なされています。」

これは、詩篇 44 篇からの引用です。イスラエルの民が、昔、エジプトから連れ出し、約束の地に連れてくださったのも関わらず、今、バビロンに捕え移されていることを嘆いています。主がお救いになることができるのに、なぜ私たちが、ほふられる羊のようにしているのか？と訴えているのです。そして、旧約時代に限らず、今、パウロたちも同じようになっています。こうした疑問に対して、パウロは「しかし」という言葉で、高らかに宣言します。

<sup>37</sup> しかし、これらすべてにおいても、私たちが愛してくださった方によって、私たちは圧倒的な勝利者です。

「圧倒的な勝利者」と言っています！単なる勝利者と、圧倒的な勝利者の違いは何かと言いますと、単なる勝利者は戦って勝つことを意味します。けれども、圧倒的な勝利者とは、すでに戦っている時から、勝利が確定していることを意味します。圧倒的な物量でしょうか、また先手を打った戦略や戦術でしょうか、戦っているのですが、勝利が決まっていながら戦っているのです。どんな苦しみを経ようとも、すでに勝利が決まっています。イエス様が弟子たちに、「わたしはすでに世に勝ちました。」と言われましたね。

大事なのは、「これらすべてにおいても」というところです。今、見てきたように、神は、「すべてのことがともに働いて益となる」ように働いておられます(8:28)。ですから、どんなに不利に思われるようなことが起こっていても、神はそれらをご自分の善のために働かせるのです。敵は最も不利になる条件をどんどん突き付けてきます。ところが神は、キリストの愛というマジックによって、それらの不利な条件をすべて、ごっそり有利な条件として相働かせるのです。キリストの十字架刑という、宗教指導者らの人殺しならず、神殺しという、歴史の中でも最も大きな悪を、全人類のための永遠の救いのご計画の中に組み込んでおられるのですから。

## 2B あらゆる被造物 38－39

キリストの愛は、かくも深く、そして高いです。そのことをあらん限りの表現でもって、パウロは語って、自分の思いをしめくります。

<sup>38</sup> 私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いたちも、支配者たちも、今あるものも、後に来

るものも、力あるものも、<sup>39</sup>高いところにあるものも、深いところにあるものも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

パウロは二つの極端を並べて、強調しています。一つ目は、「死ぬ、いのちも」です。自分が死ぬことになってもキリストの愛から引き離されない、生きていても同じだ、ということです。「ピリ 1:21 私にとって生きることはキリスト、死ぬことは益です。」次の、「御使いたちも、支配者たちも」とありますが、御使いは神の仕える霊ですね。支配者とは、神に敵対する、墮落した天使たちのことです。パウロが、エペソ人への手紙で、これらの勢力のことを語っていました。「エペ 6:12 私たちの格闘は血肉に対するものではなく、支配、力、この暗闇の世界の支配者たち、また天上にいるもろもろの悪霊に対するものです。」三つ目は、時代です。「今あるものも、後に来るものも」であります。今あるところにある苦しみがありますね。後に来る、つまり死んだ後、あるいは世の終わりにあるものです。そして四つ目は、これは対比ではないですが、「力あるものも」であります。これは、人の権力もそうでしょうし、自然にある力もそうでしょう。そして最後、五つ目は、自然における高いところ、深いところですよ。

「そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」としめくります。これはすばらしいです。どんな被造物も、実は終わりの日には、主キリスト・イエスにある神の愛の前で、この方にひれ伏すことになります。「黙 5:13 また私は、天と地と地の下と海にいるすべての造られたもの、それらの中にあるすべてのものがこう言うのを聞いた。「御座に着いておられる方と子羊に、賛美と誉れと栄光と力が世々限りなくあるように。」」御座に着いておられる方が神であられ、そしてキリストは「子羊」と呼ばれています。ここに、キリストにある神の愛があるのです。子羊というのは、私たちの罪のために屠られた方です。この方の前で、天と地にあるあらゆる造られた物が、ひれ伏して賛美しています。

私はここで、パウロが「しめくった」と言いましたが、まだ8章ですね。9章以降があります。パウロは、一見矛盾した言葉から言い始めます。「9:3b 私自身がキリストから引き離されて、のろわれた者となってもよいとさえ思っています。」とまで言っているのです。今、引き離されることはないと言ったのに、そこまで言うてしまう矛盾。それは、「ユダヤ人にもギリシア人にも、すべて信じる者に救いを与える神の力」が福音なのですが、その肝心のユダヤ人の多くが福音を拒んでいる、という問題です。福音の中にあるパラドックス、逆説を、9章から11章の中で見ていきます。これこそが、実は福音にある神の義の骨格をなしていて、魚でいれば、肉の部分ではなく骨の部分になります。これまではお肉を食べてきました。次は骨なので、そのまま食べられないところ。でも、最も大事なところですよ。